



不可解な現実に向き合え！

「ユダヤ人を絶滅させなければならない」

なぜ、このような残酷な思想が受け入れられ、

多くの一般市民が史上最大の悪事に加担した

のだろうか。これを理解不能な悪魔の所業と

して糾弾するのではなく、現実の出来事とし

て理解するべきだ。『全体主義の起原』は、

1906年生まれのユダヤ系ドイツ人で、自ら当

事者でもある哲学者ハンナ・アーレントがこ

の難題に挑戦した全3巻の大著である。1巻

では、全体主義に収斂する重要な思想の一つ

である反ユダヤ主義を扱っている。

なぜ、国民国家が形成された20世紀ヨーロッパ

で反ユダヤ主義が受け入れられたのか。

なぜ、ユダヤ人は非国民として扱われたのか。

様々な背景から反ユダヤ主義について分析を

行っている。その中の一つに、「ユダヤ人は世界征服を企てる秘密結社である」と主張した『シオン賢者の議定書』という偽造文書がある。ナチスはこの文書を引用して、反ユダヤ主義の宣伝をした。この文書が反ユダヤ主義の起原であるというわけではないが、ナチスが「偽造文書でも宣伝の役に立つと考えた」というのは興味深い問題の一つだ。これを現代に当てはめて考えるとどうなるのだろうか。例えば、テレビなどで評論家が難しい問題を分かりやすく解説していたとする。あなたは評論家の言うことに疑問を持って裏を取るだろうか。あるいは、あなたはなぜこの書評を読んでいるのだろうか。キャッチコピーやカバーが気になって読んでくれた人も多いのではないか。また、こういう場合はどうだろうか。シンプルなキャッチコピーを用いて、特定の人物や団体にとって都合の良いフェイクニュースが流布されていたとする。

評論家が分かりやすい口調でそのニュースを肯定する解説をしているとする。あなたはそのニュースに疑問を持つことが出来るだろうか。多くの人は出来ないのではないか。しかし、このような思考停止した人が多数派になった時、危険思想が受け入れられる条件の一つが整ってしまふのである。同じ過ちを繰り返さないためには、当時のヨーロッパで何があったのかを正確に理解し、どうすれば悪夢が現実にならなかつたのか皆が考える必要がある。『全体主義の起原』は、そのためのヒントを我々に与えてくれる。内容が難解なため一筋縄では読めないかもしれないが、是非とも一度手にとって頂きたい。